

都・建設予定地 生活記 (14)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

僕がはじめてインドの土を踏んだのは、今から七年前のことになる。大学ではヒンディー語を専攻していたし、インドのことも専門的に勉強していたのだから、ほかの人たちよりは、軽いカルチャーショックで済んでいたかもしれない。それでも初めて踏み入れた世界は未知のものだらけで、驚くことばかりで、三週間の旅行の間に、持ってきたデジカメのメモリがいっぱいになってしまうほど、たくさんの写真を撮ったものだ。この七年の間にパソコンもデジカメも新しくなってしまったけれど、その写真は、いまだに全部残してある。多分、このままずっとハードディスクの一角を占領し続けるだろう。一枚も消さずに。

七年前は千枚以上の写真を撮るくらい衝撃を受けているくせに、最近では「インド、思ったほど刺激ないな...」「わりと普通の国だよな」「あーよくあるよくある」などと思って、写真を撮る気もなくしているし、そもそもデジカメを持ち歩くこともほとんどない。とは言え、「おお、すげえ」と思うことがないことがないでもなく、そんな時は携帯で撮っておこうとも思うのだが、車窓を流れていってしまうと「すごかったなあ」くらいで終わってしまう。

ただ慣れた、と思えばいいのだろうか。「たくさん写真を撮る＝感性が豊か」とは思わないけれど、それでもずいぶん無感動な人間になってしまったような気がしてくる。

僕だって「インドにいながら、果たしてそんなんでいいのだろうか」と思うときはまあり、そういう時は旅行に出かけてみたりもする。旅行に行くほどでもない時には初インドの写真を見返してみることもある。これが意外と面白い。今思うと「なんでこれを撮ったのだろう」と疑問に思うようなものが結構あるものだ。銀色の食器とか、昼寝をしている犬とか、丸く開いたコンセントの形とか、エレベーターが表示する「0」とか。

今となってはどこにでもあるようなものだ。見かけたところで何か思うことさえない。ただ、そんなものを写真に収めたいと思うほど心揺さぶられた時期があった。それを思い返すと、なんだか随分遠くまで来たような気がする。少なくとも、十年前の自分には想像の出来ないところにいる。

そんな最初の写真を見ていると、きっと今写真を撮らなくなったのも、無感動になったわけじゃなく、そういう時期をすっかり越えただけなんだろうと思えてくる。そう思える

のは、全然悪いことじゃない。初インドの写真は、そうやってなんとなくだけど、僕を安心させてくれる。少しばかりの恥ずかしさと一緒に。

ところで、今のところ僕が最後に撮った写真は、正月に飲んでいたビール瓶である。写真を撮るのはいいが、これはこれで心配になるし、少しどころか相当に恥ずかしい感じがする。

グジャラートが「住めば都」となる日はまだまだ遠そうだ。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。